

「日本は80年周期説で破滅する」

プロローグ——日本の破滅、日本の始まり

●日本国の制度疲労

日本史をふり返ると、この国は常に80年周期で破滅の時を迎えてきた。

詳しくは本文に譲るが、江戸時代の終焉、第二次世界大戦の敗戦、そして、これから訪れる現代の破滅……。いずれも「創って40年、壊して40年」で、発展、衰退、そして破滅という循環サイクルを描くという共通点がある。

私は、愛知県名古屋市を拠点にする経営コンサルタントだ。地元はもちろんこと、全国各地の中小企業の情報が生で入ってくる。バブル崩壊後、いっこうに上向かないこの国の経済。その原因は、日本の企業の90%以上を占める中小企業の窮乏ぶりを見ればよくわかる。第二次世界大戦の敗戦、高度経済成長を経て、極限まで合理化・効率化を進め、極貧状態の国家を世界第二位の経済大国にまで押し上げたこの国のしくみが、いま“制度疲労”を迎えているのである。

その結果、日本は、これから再び破滅の時期を迎えることになる。

なぜ80年周期のサイクルに気づいたかという点、これはまったくの偶然であった。私はもともと、日本史が好きである。年表と地図を眺めるのが好きで、いくら見ても飽きることはない。

そんなあるとき、ふと「年表を円で描いたらどうなるか？」という疑問が頭に浮かんだ。年表というのは、普通なら横に書き出すか、縦に書き出すかである。それを円で書いたらどうなるか？「歴史はくり返す」と言われるのだから、それなら円でもいいはずだ。

そこで問題になるのは、さて、では何年で1周するかということである。そこでひらめいたのが、「80年」という単位だった。なぜ80年なのかと問われても、正直なところ、自分でもわからないとしか言いようがない。それは天から降ってきたかのように、突然頭に浮かんだ数字だった。もしかすると、年表がボロボロになるまで見てきていたため、いつの間にか無意識に、その中にある種の法則性を見出していたのかもしれない。

実際に円を描き、80年周期で日本史の史実を書き込んでみたところ、驚愕した。破滅→復興→発展→衰退→破滅というサイクルが、不思議にピタッと符合するのだ。

どうやら歴史には、ひとつの周期があるようだ。それは四季にたとえるとわかりやすい。

冬：悪循環の末にやってくる、八方ふさがりともいえる最悪の時期（破滅）

↓

春：壊すべきものを壊し、生みの苦しみを伴いながら、再建をする時期（復興）

↓

夏：希望に満ち、自分の活動に自信と意欲が持てる時期（発展）

↓

秋：安定が長く続いたおかげで慢心に陥り、どんどん落ち込んでいく時期（衰退）

言ってみれば、社会の仕組みにも“賞味期限”があり、それを過ぎると制度疲労を起こしてしまうということなのだろう。このようにグルリと一回りする周期性を明らかにするのが「80年周期説」だ。

そうなると思えるのは、今後である。

日本人にとって身近な破滅は1945年（昭和20年）の第二次世界大戦の敗戦である。その80年前の1865年は、事実上薩長同盟が成った年だ（実際の成立は1866年1月）。ここから江戸幕府は崩壊へと転げ落ちることになる。つまり、江戸時代265年の破滅が決まった年だともいえる。

そして、1945年（昭和20年）の80年後は2025年である。復興→発展→衰退→破滅に80年の周期性があるとするならば、現代日本は、2025年に再び破滅の時期を迎えることになる。最近の日本経済の低迷ぶりを見ると、この予感、拭いても拭いても消し去ることができないほど、現実味がある。

私は、今後起こりうることを想像しながら、背筋が寒くなった。このことを人々に伝えなければならない。そう思うと、いてもたってもいられなくなり、警鐘を鳴らす意味で本書を著した。

そして、私の嫌な予感は当たってしまった。

●破壊と再生

本書を脱稿し、推敲を進めていた2011年3月11日、東北地方を巨大地震が襲った。東日本大震災である。高さ10メートルを超える津波が襲ってくる光景は、われわれ日本人が永久に忘れることのできない恐怖となって心に焼きついた。

日本史には、80年周期で破滅が訪れるサイクルがあると書いたが、じつはその破滅は突然にはやっけない。破滅の15年ぐらい前に世の中をひっくり返すような大事件が起こり、前後して天変地異も生じ、それらが引き金になって、転落するように落ちていき、ついに最悪の瞬間、破滅期を迎えることになっているのだ。

当初、もしこの歴史のサイクルが本当に存在するならば、「15年前に起こる大事件」とはなんなのか、それが私にはわかっていなかった。私は、中国・上海でバブル崩壊が発生し、それこそが「大事件」になるのではないかとイメージして執筆を進めていた。そこに起きたのがこの大震災である。

今回の東日本大震災が、破滅の「15年前に起こる大事件」なのか、あくまで破滅期に付随する天変地異でしかなく、これから大事件に当たる出来事が勃発するのか、それはまだわからない。だが少なくとも、今回の大震災を契機に、はっきり2025年の破滅へ向けて日本が動き出したことは間違いない。

というのも、今回の大震災は、地震・津波被害もさることながら、震災後に日本経済に与えたダメージが大きかった。地元・名古屋の中小企業や自動車関連の部品工場は、本書を執筆している2011年4月の時点で、操業停止に近い状態だ。入りにくい素材があるので操業したくてもできない。顧客である自動車メーカーのラインも停止だから、納品しようにも納品できないという状況にある。

事実、5月31日の日本自動車工業会の発表によれば、4月の自動車国内生産実績は前年同月比60.1%減の29万2001台で、下げ幅は1966年の統計調査開始以来、過去最悪だという。

愛知県の銀行関係者は、「6月危機」という言葉を口にしてしている。3月、4月、5月、6月と操業できない状態が続いたら、中小企業の資金繰りはどうなるか？ 持ちこたえられるところは少ないだろう。支払い不能に陥り、倒産のドミノ倒しが始まるのが6月からではないかと予想しているのだ。部品工場が倒産したら、自動車のラインはまた動かなくなる。日本経済は、負のスパイラルに陥りつつある。

この事態に対し日本政府は、地震の復興費用は、2011年度は年金原資を取り崩して行い、2012年度は税制改正によって捻出するのだという。本書で詳しく述べるとおり、この選択は「いつか来た道」を再びくり返す結果になるだけではないかと、私は危惧している。すなわち日本は、大地震→経済破綻→政府の財政破綻というコースをまっしぐらで走っている感じがしてならないのである。

震災の年である2011年は、2025年の破滅の「15年前後」といっていいタイミングである。やはり日本は、これが引き金になって、転落への道を進んでいくことになりそうだ。

むろん破滅といっても、日本という国が世界から消滅するわけではない。幕末も、第二次世界大戦の敗戦も、それまで社会を動かしていた制度が崩壊し、世の中はひっくり返って大混乱した。だが日本人は、その都度、破滅から再び立ち上がり、新しい日本をつくってきた。次なる破滅が本当に訪れるとしても、それはまた、再生への第一歩ともなりうる。

ただし、その破滅をどのようにして軽減できるか、また、「創造的な破壊」とすることができるか、これが重要である。もし、致命的な破滅の仕方を迎えれば、日本は世界の三流国に墮して、再び浮上することはないかもしれない。しかし、限界にきた制度を刷新し、新しい国づくりへと繋げることができる破滅であれば、希望はある。

いまこそ日本は、最悪のかたちの破滅を避けるため、歴史に学ぶべきだ。これから日本の再建を目指すうえでは、ひとつの見本がある。それは江戸時代の天保年間（1830-43年）に行われた天保の改革だ。ただし、水野忠邦の行った徳川幕府の改革ではない。私が注目するのは、長州藩および薩摩藩の改革だ。

当時、両藩はひどい財政悪化に苦しんでいたが、名家老が登場し、命懸けで再建に取り組んだ。そのおかげで財政再建を成し遂げることに成功した。その後、両藩が幕末期に軍艦や銃を外国から購入し、地方の外様大名でありながら時代を左右する力を持つほどの大藩になることができたのは、まさしくこの時期の改革のおかげだった。

一方、水野忠邦が行った幕府の改革は、掛け声だけで挫折し、幕府はその後、滅亡への道を歩むことになった。この天保年間の改革の成否が、その後の命運を左右したのである。

私が思うに、仮に1853年にアメリカ海軍のペリー提督が来航しなかったとしても、江戸幕府は遠からず破綻していただろう。一方、薩長は、雄藩として歴史の表舞台に躍り出ることになった。この天保期に薩長はどんな改革を行ったのか？ そこに日本再建のヒントがある。

●日本の命運

現代日本でも、日本の破滅を予感させる巨大企業の崩壊があった。2010年1月の日本航空の破綻である。「ナショナル・フラッグ（国民の翼）」と呼ばれた日本航空を破綻させたものはなにか？ その内部に最大の原因があった。

はたして日本航空の社員に、「うちの会社が潰れるかもしれない」という危機感を持っていた人物はいただろうか？ 私は、その瞬間を迎えるまで誰もいなかったと思う。「うちの会社にかぎって潰れるわけがない」という慢心に満ちていた。上から下まで、「最後は政府が救済するだろう」という甘えに満ちていた。その慢心が会社を潰した。

日本航空は、使命感のないトップ、派閥抗争に明け暮れる幹部、自分たちの権利ばかり主張する社員の集まりだった。とくに呆れ果てたのは、高額な年金の減額に最後まで抵抗したOBたちだ。世間的に見れば、イマドキありえないような高利回りの年金を受給していて、会社の破綻が目前に迫る中、なおその減額に同意できないと最後まで抵抗したのは、「ワガママにもほどがある」と思ったのは私だけだろうか？

日本航空の社員は、昔のよい時代の思い出を引きずりながら、それを捨て去ることができなかった。いつしか高コスト体質に染まり、世界でまともに戦うこともできなくなっていた。あるのは歪んだプライドのみで、それが改革のブレーキになった。日本航空を見ていて、そこに「日本の明日」を重ね合わせてしまったのは、私だけだろうか？ そしていまや、東京電力も日本航空の後を追っているような気がしてならない。

なんとしても、日本は致命的な破滅を避けなければならない。やがて避けられない運命だとしても、さらなる再生へと繋がるものとしなければならない。そのために必要なのは現実直視だ。

日本経済は、東日本大震災を引き金にして血流が止まってしまいそうだ。もともとあった財政赤字の問題はもちろんのことながら、高齢化、年金・健康保険制度の破綻、製造業の空洞化、未婚化、少子化など懸念材料は事欠かない。震災による経済活動の縮小は、悪化のスピードを速めるだろう。いま必要なのは、イメージではなく、データに基づく問題点の分析だ。そこから解決策も見出せるはずである。

*

本書の執筆に着手したのは、2010年（平成22年）秋のことであり、2011年（平成23年）1月には、骨子はほぼ書き終わっていた。私が「Xデー」と予感する2025年（平成37年）まで、まだ14年間の猶予がある。この14年間、これからじつに目まぐるしい変化が起きるだろう。たとえば、ペリー来航から明治維新まで15年間だったが、その間の社会の変化は筆舌に尽くしがたいほどだった。これからの14年で、どんな改革をどれだけ実行できるかで、その先の日本の命運が決まる。

今回の東日本大震災で被害にあった方々には、心よりお見舞いを申し上げたい。そして、震災からの復興はもちろんのこと、2025年を超えて日本の未来を築いていくために、本書をひとつの警鐘としていただければ、著者としてこれに勝る喜びはない。

2011年7月

北見昌朗

目次

第1章 給与崩壊こそ、日本の「終わりの始まり」

給与崩壊が社会保障崩壊を呼ぶ
消えた日本人全体の年収「30兆円」

第2章 日本の歴史は「創って40年」「壊して40年」

歴史は「破滅期→復興期→発展期→衰退期」のサイクル
「謙虚に登って、驕って下り坂」の繰り返し

第3章 幕末と昭和の「Xデー」をもとに近未来を予測する

2025年 突然のデノミ発表 預金封鎖へ
お上が借金を踏み倒すのは歴史の常
近未来の悪夢 中国の宣戦布告 日系企業の資産接収
「悪夢」の引き金は中国バブル崩壊か？

第4章 最悪の破滅を避けるための道

破綻を避けたければ、長州藩と薩摩藩の天保の改革に学ぼう
殖産興業と緊縮財政で長州藩を救った村田清風
“汚れ役”を引き受け薩摩藩を雄藩にした調所広郷
幕府滅亡の要因を作った老中・水野忠邦
過去の改革に何を学ぶべきか

第5章 日本再建のために一私の「船中八策」

- 一、65歳定年制ヲ導入スベキ事
- 一、増税ナキ財政再建ヲ実現スベキ事
- 一、年金ノ改革ヲスベキ事
- 一、健康保険ノ自由化・民営化ヲスベキ事
- 一、宗教法人ニ課税ヲスベキ事
- 一、公務員給与ノ改革ヲスベキ事
- 一、道州制ヲ導入シテ市町村ヲ廃止スベキ事
- 一、水ト食料ノ安全保障ヲスベキ事

第6章 「Xデー」を乗り切るための経営者の8つのポイント